



Title	言語的修復行動における他者開始について：形式整理と分類基準を中心として
Author(s)	張, 玲玲
Citation	研究論集, 12, 249(左)-266(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51971
Type	bulletin (article)
File Information	014_ZHANG L.pdf



[Instructions for use](#)

言語的修復行動における他者開始について

— 形式整理と分類基準を中心として —

張 玲 玲

要 旨

本稿では、構造上から修復行動の一部、いわば「修復開始」における他者開始という部分に限定して考察を行った。本稿は、他者開始について論じる前に言語的修復行動の主要組織について考察を行った上で、これまでの他者開始についての先行研究を踏まえながら、その問題点を指摘し且つ修正案を提出したものである。

修復の概念についてこれまで様々な見方を提出されてきたのであるが、なかなか統一的な結論に至っていないようである。その原因はおそらく、「トラブルに対処するための装置」という従来の定義の曖昧さにあるのであろう。というのは、修復対象に当たるトラブルに対して明確な定義を決めなくては修復を明確に定義することも困難だからである。トラブルの性質に着目してその種類を大別した上で、修復行動を「構造と機能」という二つの方面から考察するものは管見の限りまだいないようである。そこで、本稿では、トラブルに対する「修復開始+修復実行」という修復構造における前者の一部に対して分析を行った。

具体的に言えば、英語及び日本語における他者開始表現について整理を行った先行研究をまとめてみたところ、その中には①他者開始の一部しかない②分類基準が不明瞭であるといった二つの問題点が浮かんできた。そこで、①を解決するために、まず組織別に「他者開始・他者修復」(Other initiated Other repair, OIOR)と「他者開始自己修復」(Other initiated Self repair, OISR)という2種類に分けて開始形式を整理し、この2種類によって開始形式も全く異なることが発見されたのである。そして、②に対して、「トラブル源を特定する程度の強弱」という従来の基準では判断不能な例が数多く観察されたため、それを修正するために、話し手の「修復要請の意図明示性」という視点から「相手に課する労力」及びそれと正比例になっている「相手に課する修復労力」という提案を出し、従来の分類基準での順序付けにおける不合理なところを解決した。

1. はじめに

本稿はまず、修復の各組織について事例を挙げながら説明する。組織別に開始表現を考察する必要性を主張した上で、修復における他者開始表現について、収集した例で形式整理することと、従来の分類方法を踏まえてより明確な基準を提案して分類しなおすことを目的とする。

本稿は次のような構成をとる。まず、2. において修復の組織について述べ、3. において修復における他者開始についての先行研究をまとめ、その不足を指摘した上で、4. において本稿でのデータについて紹介し、収集した他者開始表現の形式を整理する。そして、5. において先行研究を参考した上での基準を提案して再分類を行う。6. でまとめる。

2. 修復の組織について

2.1 修復組織に関する先行研究

修復組織については Schegloff et al (1977), Schegloff (2000, 2001a), Suzuki (2010) などが挙げられる。まず、シュエグロフらが、Schegloff et al (1977) では修復組織を4大類型に分けており、後続の研究で補充をしてきて、英語における修復組織のありようを明らかにしてきている。そして、英語の例文を挙げながら各組織の説明については Suzuki (2010) を参照されたい。だが、日本語の例を使って各類型をまとめて紹介するものは管見の限りまだないようである。ここでは、各組織類型を表1にまとめた。

表1. 英語における修復組織類型のまとめ

主要類型	下位類型	フォーマット (最も単純な場合)
SISR (自己開始・自己修復)	i. 同一ターンでの SISR	A : T 1 (発話を産出しながら)
	ii. TRP での SISR	A : T 1 (T 1 が TRP に至ったあと)
	iii. 第三順番での自己修復 (Third-turn Repair)	A : T 1 B : T 2 (T 1 に対する連鎖上適切な発話) A : T 3 (T 1 に問題があると認識し自己修復)
	iv. 第三位置での自己修復 (Third-Position Repair)	A : T 1 B : T 2 (T 1 に対する誤解) A : T 3 (T 1 に対して自己修復)
	v. 第四位置での自己修復 (Fourth-Position Repair)	A : T 1 B : T 2 (T 1 に対する連鎖上適切な発話) A : T 3 (「T 2 が誤解のもとに発したもの」と認識させるトリガーを含む) B : T 4 (T 2 に対する自己修復)
SIOR (自己開始他者修復)	A : T 1 (T 1 に問題があると認識し、修復を開始したが、完成しなかった) B : T 2 (修復を完成した)	

主要類型	下位類型	フォーマット（最も単純な場合）
OISR (他者開始自己修復)	A：T 1（先行発話） B：T 2（先行発話に対して修復を要請した） A：T 3（先行発話に対して修復を実行した）	
OIOR (他者開始他者修復)	A：T 1（先行発話） B：T 2（先行発話に対して修復を実行した）	

2.2 日本語における各修復組織の会話例

本稿において、他者開始形式について記述する前に、2.2.1において自己開始される修復組織及びその下位類型について説明し、2.2.2において他者開始される修復組織について述べる。

2.2.1 自己開始される修復の組織について

(1)自己開始・自己修復（Self-initiation Self-repair）とはトラブル源の産出側がトラブルに自覚した場合、修復開始機会を利用して実行作業を行った場合を指す。

例(1) <BTS 親しい女性友人の雑談⑥>

- 1 A /沈黙 9 秒/卒論は例の、案を執行するわけ？。
 2 B あ、そうそう、もう進んでる。
 3 A あ、ほんと。
 4 B → 進んでるっていうか、いちおう本は読んでる。
 5 A うーん。

これはいわゆる表 1 における「第三順番での自己修復」という例である。例(1)では、B は 2 B で産出したトラブル源（「もう進んでいる」）を 4 B で自己修復を実行した。その実行部分の次のターン（5 A）で A の反応から相手の修復を受け入れたと判断可能なため、当の修復が終了したと判断できる。ただ、B は自分の卒論の進展状況について事実を述べているだけで、2 B が A にとって理解上も受容上も問題が生じないはずであるが、なぜ自己修復に導いたか、修復実行側が講じたストラテジーなどの問題点に関してはポライトネスの視点から探る価値があると思うが、これを今後の課題としておきたい。

なお、自己開始自己修復の下位類型として表 1 では i～v という 5 種類を挙げた。その中で、i と ii が従来の先行研究においても典型的な下位類型として扱われてきた。一方、他の 3 種類は組織上から見れば他者開始された修復と同じように見えるため、異なる扱い方をされてきた。本稿で、「聞き手が意図的に修復開始を要請したかどうか」ということを基準にした上で、この 3 種類も自己開始自己修復の下位類型とすべきであると主張したい。つまり、表 1 において、iii. と iv. における B や v. における A (T 3) が意図的に修復を要請していないという点によって、これらは他者開始された修復と本質的に異なっているということである。具体例は表 2 を

表2. 自己開始自己修復の下位類型の会話例

自己開始自己修復の下位類型	会話例
iii. 第三順番での自己修復 (Third-turn Repair)	例(2)〈BTS 初対面雑談⑤〉Aは大学生であり、Bは何年間会社員として働いている経験を持っている。 1 A 《沈黙4秒》あの、あれですよ、なんか社会人が、1年目っていうのはかなり厳しいもんがありませんでした？ 2 B → 社会人：そうですね。 3 A ⇒ うん、何年目も厳しかったけど。 4 B うん、そうですね。
iv. 第三位置での自己修復 (Third-Position Repair)	例(3)〈会話リソース②〉二人は各自の旅行経験をめぐって話している。 1 A 東京は毎、毎、半年に一回ぐらい行くかな、それ以外だと、 2 高校の修学旅行か、 3 B どっかへ行ったのか。 4 A 関西と沖縄。 5 B → 2回？ 6 A ⇒ いや、うちの高校って何か変わって《相手が笑い出す》、関西、 7 沖縄、関西に行って（え）、 8 B っていうコースと、あとロスに行くコースがあって、 9 A すげえ。
v. 第四位置での自己修復 (Fourth-Position Repair)	例(4)堀口(1997：p112)同じテニスクラブに所属する二人のやりとりである。 1 A ダンロップは高いからブリヂストンにしようよ。 2 B 高くないよ。 3 A → ボールだよ。 4 B ⇒ あっ、ボールか。ラケットと思ったよ。

参照されたい。

例(2)～例(4)において、→で示された発話がすべて連鎖上では適切なものであり、発話の展開からその発話者にとってのトラブルが特定できないことにより、他者開始（聞き手に修復を要請する）されるのではなく話し手自身による修復実行であると判断している。

(2)自己開始・他者修復 (Self-initiation Other-repair) とは、トラブル源の産出側がトラブルに認識した場合において、修復開始機会を利用したものの、トラブルと同じ順番で修復が完成できず、聞き手によって修復の実行作業を行われた場合を指す。

例(5) 〈BTS 友人同士雑談⑤〉

- 1 A 参考文献のところ、あ、参考文献じゃない。
- 2 B → 教科書。
- 3 A の(うん)、あのー何て言うんだっけ、あのー説明んところ、(うん)この言葉って線引いて [あって],,
- 4 B [あー、そう] そうそう [そう]

5 A [後ろ] で参照みたいなやつ。

例(5)では、1 A では A がトラブルに認識し、修復を開始したものの、そのターンで修復が実行されなかったまま TRP に至り、結果的には B によって修復を完成した。3 A における「の」(B のターンを続けたのを標示する) という表現から B の修復が成功したと判断できる。Fereník (2005) では、こういう類型が最も少ないという観察結果が報告されたが、日本語においても同じような傾向が観察できるかは今後の考察が必要である。

2.2.2 他者開始される修復の組織について

(3)他者開始・自己修復 (Other-initiation Self-repair) とは、トラブル源の産出側がトラブルに認識していない或はトラブルだと思っていない場合 (聞き手との判断の間でずれが生じた) において、聞き手が修復開始機会を利用して修復要請表現を発したあと、トラブル源の産出側によって修復の実行作業を行われた場合を指す。

例(6) <BTS 初対面雑談⑦>

- 1 A なんか、スクーターって 30 キロが、限界なんですって。
2 B え？
3 A → 30 キロが、あの、制限速度。
4 B あ、そうなんですか。
5 A =うん。

例(6)では、B にとって 1 A の発話には理解のトラブルが生じたため、2 B で「非特定の開始標識 ('open' class repair initiators)」を用いて修復を要請し、トラブル源の産出側 A によって 3 A で修復を実行した例である。B がトラブル源の所在を明言していないため、A にとって先行発話において聞き取りの問題か、理解或は受容の問題か不明瞭であるため、どの部分を修復するかそれとも最初から言い直すかという選択をしなければならない。よって、この場合においては、話し手にとってトラブル特定の労力も修復労力も相当大きいと言える。ただ、例(6)は単純な例であるため、判断がそれほど困難ではないが、より複雑な場合になると、例えば、1 A の発話が長く続けられた場合なら B がこういう開放的開始形式を使いづらくなると予測できる。聞き取りの問題だと即時的に聞き返しができるものの、理解の問題や特に受容の問題が生じる場合には、相手の発話が完結しないとトラブルが完全に特定できないことがある。しかし、相手の発話が長ければ長いほど無指定的に修復を要請するのはトラブル源の特定労力と修復実行の労力が大きくなるため、従ってこのような場合においては修復要請がよく遅延されるはずだと予測できるが、これは実例の分析を通して検証することが必要である。

(4)他者開始・他者修復 (Other-initiation Other-repair) とは、トラブル源の産出側がトラブル

に自覚していない或はトラブルだと思っていない場合（聞き手との判断の間でずれが生じた）において、聞き手が修復開始機会を利用して実行作業を行った場合を指す。

例(7)〈会話リソース②〉二人は台湾の食べ物について話している。Aが一度台湾に行ったことがある。

- 1 A 何かお茶に中国人が砂糖を入れるなんて《相手が笑い出す》，だって，普通にコンビニにこういうの《テーブルに置いてあるウーロン茶を持って》ポンと買って，飲
2 んだら砂糖を入れて（えっ！）緑茶とかそういうの関係なく。
3
4 B へ：：：：：
5 A これは何かもう，，
6 B まずい。
7 A → まずいというか，飲めない。
8 B う：：ん，う：：：ん。

例(7)は，先行発話の一部を繰返した上で「というか」という形式で不同意を表し，他者修復を実行した。

なお，上記の4種類の修復組織は一回だけで終結する場合なら上記のいずれかに当たるものの，実際の会話では，修復が何回も繰り返される場合や繰り返されても失敗したりする場合などがある。その場合には，この4種類の組み合わせで達成される可能性があり，事例の分析を通してその特徴を解明していくのは今後の課題である。それでは，上記の各修復組織の特徴を踏まえながら，他者開始についての考察に入りたい。

3. 他者開始についての先行研究

3.1 先行研究の概観

この節では，Schegloff et al (1977)，Schegloff (2000, 2001a)，Suzuki (2010)を中心に紹介する。

まず，Schegloff et al (1977)においては，他者開始の発生位置と形式について触れている。まず，「自己開始と他者開始はそれぞれ決まった位置を取る」（西阪2010：p 172）と述べ，他者開始は「トラブル源の出現した順番の直後の順番」にしか現れないと主張した。そして，表3で示したように5種類の「他者開始の技法」を列挙した。

表 3. Schegloff et al (1977) における他者開始形式

	フォーマット	Schegloff et al (1977) の例
①	無限定の質問 ¹	<i>Huh? What?</i>
②	質問語でできているもの	<i>Who? Where? When?</i>
③	トラブル源を含む順番の一部を繰り返し、かつそこに質問語を付加する	<i>All the what?/The who?/ Met whom?</i>
④	トラブル源を含む順番の部分的な繰り返し	<i>One ten?/Nothing::</i>
⑤	理解候補の提示	<i>You mean homosexual?</i>

そして、他者開始の発生位置については、Schegloff (2000) では、Schegloff et al (1977) においての論述を修正した。つまり、「トラブル源の出現した順番の直後の順番」という位置以外にも他者開始が発生可能であるとして、(1) Multiples (複数回の他者開始がなされる場合) (2) Larger unit in progress (より大きな単位の発話を優先する場合) (3) Addressed other goes first (複数参加者の会話において、指定された聞き手による開始を優先する場合) (4) Post-response (取りあえず連鎖上適切な返事をしてから修復開始をする場合) といった 4 種類をあげた。

また、他者開始の形式については、Suzuki (2010) によれば、Schegloff (2001a) では Schegloff et al (1977) においての 5 種類のほか、⑥トラブル源を含む発話の一部を取り上げて質問するもの (ex: What's a Gwaff?) と⑦相手の発話全体に対して質問するもの (ex: Whatya mean by that?) という 2 種類を追加した。そして、この 7 種類は、Schegloff et al (1977) で述べたように、「このタイプは、順不同に並べられたものではない…いくつかの変数の上に働く相対的な「強さ」「力」といったものに基づいている (西阪 2010 : p 236)」として、Schegloff (2001a) では「トラブルを特定する程度の強弱」という基準でもって順序付けたのである。

最後に、Suzuki (2010) では、上記で述べた順序に従い、日本語における他者開始形式を整理した。表 4 で示す。

3.2 先行研究の問題点

主に二つの問題点があると思われる。

第一、他者開始される場合には 2 種類の修復組織を導きうるのであり、一つは「他者開始自己修復」(略称：OISR) であり、いま一つは「他者開始他者修復」(略称：OIOR) である。しかし、これまでの先行研究において扱われてきたのはすべて OISR の場合であり、OIOR という組織における他者開始表現の特徴については完全に無視されてきたと言っても過言ではない。それは Schegloff et al (1977) に由来したある論点と密接な関係があると言わざるを得ない。その論点とは、「修復の自己開始は自己訂正を導く、一方、修復の他者開始も自己訂正を導く」と

¹ Drew (1997) で取り上げた “open forms of repair initiation” と同じ形式である。

表4. Suzuki (2010) における他者開始形式²

	フォーマット	トラブルの 特定程度	Suzuki (2010) の例
(1)	なし		え？ん？はい？あ？は？何？
(2)	疑問詞+上昇イントネーション		誰？いつ？どこ？
(3)	部分繰返し+疑問詞		おばあちゃんが何？
(4)	部分繰返し+引用形式“って”+(疑問詞)		そちらって：/どこ？それ。
(5)	なし		どうということ？/よく分からない
(6)	全部/部分繰返し (+動詞句に‘の’を付加)		今日？/日比谷線？/行ったの？
(7)	i. X じゃない？ ii. 部分繰返し+って+理解候補		最強

いう自己訂正の優先性についてのものである。つまり、OIOR という組織が最も非優先的なものであるという認識はそれ以来の修復に関する研究において「暗黙の了解」になっているようであり、その例が少ない分、取り上げて分析する研究も少ないため、他者開始表現を分析する際に除外されてしまったのであろう。

第二、「トラブル源を特定する力の強弱」という基準についてである。この基準によれば解釈できないことが生じてしまう。例えば、表4で示した例に限ってみれば、(1)の例、いわゆる「非特定の他者開始」ではトラブル源を特定できないとする一方、(5)で挙げられた「どうということ？」や「よく分からない」といった例ではトラブル源をより明確に特定できるかという点必ずしもそうではないであろう。そして、(4)の「そちらって？」と(7)の2番目「もうちょっとって1時間ぐらい？」とは「トラブルを特定する程度」にはあまり差がないのではないかという疑問も浮かんでくる。

この二つの問題点を解決するために、まず他者開始表現を修復組織類型によって2種類に分けてその形式を整理することと、OISR における開始表現に対しては「トラブル源を特定する程度の強弱」という基準を踏まえて、「相手に課するトラブル特定の労力」と「相手に課する修復の労力」という基準を提案したい。詳しくは5. で述べるが、その前にまず組織別に他者開始形式を一通り整理してみる。

² Suzuki (2010) では、表4にある矢印は実線ではなく破線で表示されている。なぜかという点、「非特定の他者開始」と「理解候補の提示」は両端に位置すべきである一方、「繰返し」と「トラブル源を特定する疑問形式」とはどちらが上位に位置するべきかは不明確なため、破線で表示したのである」(p 153: 筆者訳)という説明をしている。一方、Suzuki (2010: p 153) では、「細かいところについてはまだ議論の余地が残されているものの、Schegloff の提案は全体的には日本語のデータに応用することができる」と括っている。

4. 本稿におけるデータから収集した他者開始表現の形式について

本稿のデータは2種類に分けている。一つは東京外国語大学で作成された『BTSによる多言語話し言葉—日本語会話1（2007年版）, 以下はBTSで示す』に収録された会話資料であり, もう一つは『日本人母語話者による会話リソース』（2012年北海道大学文学部の学生の協力の下で収集した会話資料, 「会話リソース」で提示する）である。この中から, 合わせて65例を収集した。その内訳を表5で示す³。

表5. 本稿のデータによる他者開始形式例の内訳

修復開始の発生位置	修復組織の類型	例文数
TSとOIが離れていない	他者開始自己修復 (OISR)	39
	他者開始他者修復 (OIOR)	17
TSとOIが離れている	他者開始他者修復 (OIOR)	9

また, TSとOIが離れているかどうかは修復類型を議論する際に看過されてはならない重要な点であると筆者には思われるが, ここでは取りあえず議論せずに, 他者開始表現形式だけに集中して, 修復類型ごとに整理することを目的とする。

4.1 OISRにおける他者開始形式

ここでは, 構成上の特徴によって5種類に分けて, 量的多寡によって実例を挙げながら説明を進める。

i. 先行発話の一部を繰返し+（文末イントネーション/引用形式って/だっけ）という形式で修復を要請する場合。主に, 「そのままの語気で部分繰返し」のほか, 「明日のこと?」のような「部分繰返し+上昇イントネーション」や, 「隙がない::」のような「部分繰返し+延長」といった形式があり, 一方, 「態度って」「え, 3時の予約だっけ」といったような他の形式を付加される例もいくつか観察された。

例(8) <BTS 初対面同性同士雑談⑨> AがBの研究方向について聞いている場面。

- 1 A どう, ということやってらっしゃるんですか?
 2 B いや, いや, もうホントになんか, 私の指導教官の人がなんか, もうヴォイスとか,,
 3 A → ヴォイス?

³ 略称について説明しておく。TSは‘Trouble-source’の略称であり, OIは‘Other-initiation’, そしてTTRは‘Third-turn repair’とそれぞれ表示している。

- 4 B ヴォイスとか、だから受身とか(あー)、使役とか、そういうやつとか、あとまあ、
5 周りにはアスペクトとかやってる人(あー)とか、まあ、私もまあ、それ似てま
6 すね。
7 A えー、あ、(ええ)へえー、あぁー。

ii. 非特定の標識で修復を導いた場合。主な形式には、「えっ?」「あん?」「ん?」「え、どうい
うことですか?」「えっ、それは何か:」「どういうこと?」などが観察された。

例(9) <BTS 初対面雑談③> A が中国に留学した時 CD の海賊版を購入した経験があり、二人が
それについて話している場面。

- 1 A でもほんと、明らかに、か、海賊版って感じで: (あー)途中で飛んだりとかしてる。
2 B それって、違法ではないんですけどっけ? 大丈夫なんでしたっけ?
3 A → えっ?
4 B 売る、売る人は違法なんでしたっけ。
5 A 違法なのかな? でもけっこう堂々と、店を出して…。
6 B そうですよ。

iii. 好ましくない返事で修復を導いた場合⁴。主に、「～かね/かな/かしら」といった文末形式が
付加された例を観察した。

例(10) <BTS 友人雑談②> 二人は「相手に対して抱いている印象」という話題をめぐって話して
いる。B の考え方がおかしいと言い出した後。

- 1 A だから、ちょっと考え方がおかしいんや、相当。
2 B → 考え方おかしいかな?
3 A 考え方っていうか、考えることがおかしい。だから、何か、なんつーの、何だろうね。
4 B なんやろーね。
5 A だか、なんかよく分からんねん、とにかく、おまえの言うことは。

iv. 「疑問形式+上昇イントネーション」という形式。主に、「何ですか?」「何ですか、それ」
「誰?」などのような例を観察した。

⁴ これについては、Levinson (1983, p 339) では、以下のような論述がある。‘We have also briefly indicated that the delay component of a dispreferred second can be realized by what may be called a next turn repair initiator, or NTRI, which invites repair of the prior turn in the next turn.’ これは、このカテゴリを立てる根拠の一つであると思われる。

例(11) <会話リソース 2> 二人は O が台湾に行ったときの経験について話している。

- O 1 台湾：観光みたいなことをしたのは、本当に故宮博物院に行った、それっきりなんで。
M 2 → 何、何ですか、それ。
O 3 故宮博物院ってあのう、何だっけ、元々北京にあったお宝をその、まあ、ごそつ
4 と(う：：ん)、その、国民党政府が台湾に逃げた時に一緒に持ってたんで(う：：ん)
5 で、を展示している(う：：ん)博物館、で、けっ、かなりいいものがあった、
M 6 あ～あ。

v. 「理解候補+上昇イントネーション」という形式。例(12)のほか、「～じゃないの?」といったような焦点や前提を持つ疑問文で修復を要請する形式が使用された例を観察した。

これと関連して、串田(2009)では「①指示語の復元②省略されたことばの復元③再定式化(reformulate)④挿入可能なことばの提示⑤置き換え可能なことばの提示」という5種類の理解チェックに用いられる基本的形式を提示しており、一方で、Kusida(2011)ではその論述を一部修正し、「a. 直示表現で理解候補を示す b. 指示語の復元 c. 挿入可能なことばの提示 d. 置き換え可能なことばの提示(p.2721:筆者訳)」という4種類にまとめあげた。しかし、串田の論述は「理解候補を受けた側が「うん」もしくは「そう」という表現で肯定的返答を与えた場合」に関するものであり、本稿で観察された「理解候補を提示したが、それは不適切であったため、自己修復を導いた」という現象とは性質が異なっていることを予め断っておきたい。つまり、前者は Schegloff et al (1977) で言及された「弱められた他者訂正(modulated other correction)」に当たる現象であり、後者は「他者開始・自己修復」に相当するものである。例(12)を参照されたい。

例(12) <BTS 友人雑談⑤> B は彼女との別れ話をしている途中。

- 1 A それで、お前からもう、
2 B [いや],,
3 A [バイ] バイっつった [↓]
4 B おれか、おれからじゃないな。
5 A → あっちから?⁵。

⁵ ここに関してはある重要なことを無視することはできない。それは、この5つの例において、修復開始側が修復を要請する意図の明示程度がかなり異なっていることを指す。程度の差はあるものの、他の例と違って、例(9)におけるAは「あっちから?」という表現で必ずしも修復を要請する意図を持っているとは判断しがたく、ただ結果的に相手の修復行為を導いたに過ぎないということから、「意図的修復要請」と「結果的修復要請」に分けて議論を進めていきたい。これについては後に詳述する。

- 6 B いや、あっち、あ、ちやうちやうちやう。“もう、おれは一、もう高校辞めます”つ
 7 ていう話（うん）をした、し、もうそんときには、別れられると思ったんだよ。
 上記の内容のまとめとして、表6を提示する。

表6. OISRにおける他者開始形式の内訳

	種類	例文数
i	先行発話の一部を繰返し+文末イントネーション	10
	先行発話の一部を繰返し+(引用形式って/だっけ・・・)	4
ii	「え？はい？」のような非特定の開始標識	10
iii	「かな/かねといった文末形式」がある好ましくない返事	9
iv	疑問形式+上昇イントネーション	3
v	理解候補+上昇イントネーション	3

4.2 OIORにおける他者開始形式

ここでは、TSとOIが離れているか否かによって2種類に分けて整理する。

4.2.1 TSとOIが離れていない場合

この場合においては、主に4種類の開始形式が観察された。

- i. 「否定応答」で修復開始を標識する。主に、「いや+(ていうか/～じゃない)」「違う」「じゃなくて」などの形式が観察された。会話分析の立場から「いや」を分析した串田(2005)では、「いや」が用いられた主要な位置として挙げた6種類のうち、①相手の聞き間違いや誤解を正す発話の冒頭②自分の先行発話(部分)を撤回する発話の冒頭といったような修復と直接的に関係しているものがある。他の否定応答も同じような性質を持っていると言えよう。

例(13) <BTS 初対面同性同士雑談⑥> Aはこの実験で既に何人と話してきて、Bの前の二人が日本語教育の人だったので、Bもそうであるかもしれないと推測していたことが背景になっている。

- 1 A 「大学名1」の方ですか？。
 2 B はい、この大学院で。
 3 A あっ、じゃ、あっ、じゃあ日本語教育を。
 4 B → じゃなくて、全然…、えと、地域研究の、中国、の方の研究を[してまして]。
 5 A [あっ、そうなんですか]。あ、なるほどね、中国。
 6 B はい。

- ii. 「全体/部分繰返し+っていうか」という形式で修復開始を標識する。

例(14) <BTS 初対面同性同士雑談④> B は既に就職が決まった大学 4 年生で, A は台湾で日本語教師になる前に 10 何年間も日本の企業で働いたことがある。A は B に就職が決まってから正式に入社するまでの一年間どうやって過ごすかについて聞いたあと。

- 1 A 自分でそれなりにパソコンとか(うんうんうん), 財務とか(おおー) やっぱある
2 程度勉強しとかないと駄目なのかなあ, とか思ってるところです。
3 B 前向きですねー, んー。
4 A → 前向きっていうか後ろ向きな前向きですよ。
5 B いやいや。
6 A 就職してから苦労したくないからまあ今のうちに[やっとなきゃとか思って]。
7 B [それはでも] うん, いいと思う。役に立つ, うん。

iii. 「逆接表現」で修復開始を標識する。主に、「でも(ね)」「ただ(ね)」といったような形式が観察された。

例(15) <BTS 友人同士男女間討論③>

- 1 A 女の人はず, なんかさ(ん), 毎朝化粧をしなきゃいけないとかさ(んーんー), な
2 んか考えると, あーなんかめんどくさそうだなとか思うだけどさ(うん),,
3 B → でも, 別にしない人も[いるしね]。
4 A [でもさ](んー), なんか聞いた話なんだけどね(んーんー), なんか友達の彼女は
5 (うん) 化粧してるのを見てね, なんか“女の人って毎日化粧しなきゃいけないから
6 大変だよな”, ってつぶやいたんだって(んーんー)。そしたらね, 彼女がね
7 (んー), “男は素顔で勝負しなきゃいけないからかわいそうだよな”, とか言って。

iv. 「入出力制御系の感動詞類⁶」で修復開始を表示する。主に「あ: :」「あっ」「ん: :」などのような発音上の延長・抑揚(上昇調や促音を付けるような)などのパターンを指す。

例(16) <BTS 初対面同性同士雑談②> A は台湾の大学で日本語教師を勤めており, B は卒業後台湾へ就職しようと考えている。A は, 経営難に陥った当地の日本語学校で日本語教師を勤

⁶ 田窪(2005)での感動詞に対する分類に用いられた用語であり, 感動詞を主に「入出力制御系」(基本的に対話相手が言った内容を自分がどのように処理したかを示すもの)と「言いよどみ系」(間投詞に相当し, フィラーとも呼ばれるもの)に分けており, 本稿では前者の使用が数多く観察された。これは, 「(入出力制御系の感動詞を)上昇調で或は促音を付けたりして発音される場合には, 相手が言った内容を受理するのに失敗したことを表す機能があると田窪(p.19)で示したことと関連していると考えられよう。

めている知り合いのことについて B に話したあと。

- 1 A そうという意味では、そういうちゃんと、福利じゃないけど、うん、条件がいいところ、
 2 B そう [ですね]。
 3 A [とかで] 決まると、うん、大分楽ですよ、うん。
 4 B 条件がいいところって言ったら大学とか高校になりますね。
 5 A → あ：：：高校はちょっと非常勤：：以外（あー）は難しいかもしれない。
 6 B そうすると、
 7 A まあ、大学に入れば1番良さそうだと思う。
 8 B そうですね。

4.2.2 TS と OI が離れている場合。

この場合においては、形式上がバラエティーに富んだが、ほぼ同じパターンをなしている。それは「うん/そうですね/なるほどね+でも/ただね/いや」などのように、いったん肯定の返事をしてから逆接表現などで修復を開始するものである。

例(17) <会話リソース③> 二人 (K と N) は N の主人の仕事について話している。

- K 1 道内でガイドをなさっているんですか。
 N 2 うん。
 K 3 う：ん、すごい年間韓国人の方がすごい旅行来ますもんね、絶対需要がありますよ。
 N 4 → そうですね。でもいまはそんなに来ていないですけど、でも、
 K 5 そうなんですか。
 N 6 やっぱ震災の後だと思う。

4.2 の内容を表 7 にまとめた。

表 7. OIOR における他者開始形式の内訳

	修復開始形式のフォーマット	例数
TS と OI が離れていない	否定応答 (いや/違う/じゃなくて・・・)	7
	全体/部分繰返し+っていうか	4
	逆接の接続表現	4
	入出力制御系の感動詞類	2
TS と OI が離れている	肯定の返事+逆接の接続表現	9

5. OISR における開始形式の「強弱」について

3.2 で示したように、先行研究における「トラブル源を特定する力の強弱」という基準では、その7種類 (Suzuki (2010) でまとめた) の形式を順序づけることは無理があるため、その代わりに「相手に課する特定の労力」と「相手に課する修復の労力」という代案を考えたのである。

本稿では、トラブルを「発話産出／聞き取り」「理解」「受容」という三つの段階に分けて捉えている。後ろの段階におけるトラブルの認定は、「前の段階においてトラブルが生じなかった」ことを前提としている。例えば、OISRにおいて、相手が修復を要請する表現を発したら、受ける側にとってはまず、産出問題かそれとも聞き取りのトラブルかと判断しなければならず、もし前の段階に問題がなければその次の段階、いわゆる理解上のトラブルであるかどうかを判断し、最後に受容上のトラブルであるかどうかをチェックする、といった順序に従ってトラブルを特定する作業を行うはずである。だが、例文を観察すれば分かるが、理論上ではかなり複雑な作業が一瞬で行われるケースが殆どであり、特定失敗のため何度も修復開始を行われるケースもある。それは、聞き手が開始表現を通して、程度それぞれのヒントを与えてくれているからだと筆者には思われる。換言すれば、「相手に課するトラブル特定の労力」が異なっている開始表現が使用されたからである。

それで、4.1で示した5種類の開始形式(表6)について具体的に考えてみる。

第一、例(9)のように、「非特定の開始標識」が使用されれば、受け手は「産出／聞き取り／理解／受容」というすべての段階を範囲として特定作業を行わなければならず、話し手の「修復要請の意図」が非明示的であるため、特定の労力もかなり大きいと言えよう。

第二、例(10)で示したような「好ましくない返事」が使用された例では、受け手が聞き取りに問題が生じなかったとすぐ判断できるはずであり、「産出／理解／受容」から特定しなければならず、話し手の「修復要請の意図」が曖昧であるため、トラブル特定の労力も相当大きいであるが、「非特定の開始標識」よりトラブルにアクセスしやすいと言える。

第三、「部分繰返し+他の形式や文末イントネーション」という形式は、殆ど先行発話の一部に対しての理解問題が生じる時に限って使用されており(受容の問題にも関わりそうであるが、現時点ではそのような例が見つからない)、話し手の「修復要請の意図」がより顕在化し、受け手にとって「理解か受容」の段階から特定すればいいため、トラブルにアクセスする労力が前の2種類より小さくなったと言えよう。ちなみに、会話における繰返し発話とは、中田(1992)、福原(2010)によれば、「相手の発話を言語表現として理解できるが、内容に関して不明な部分があり、説明を求める」という「説明要求の機能」や、「内容が確かであるかどうか確認を要求する」という「確認要求の機能」や、「相手に反論・訂正を行う時、相手の感情を考慮し、和らげようとする「反論の和らげ」という機能が備わっている会話方策であるため、理解か受容のトラブルに対しての修復要請表現として使われているわけである。

第四、例(11)で示したような「疑問形式+上昇イントネーション」という形式は、先行発話の一部に対しての理解不能というトラブルが生じた場合に使われた例しか観察されていない。つまり、このような形式が使用されれば、話し手の「修復要請の意図」が明示的になり、受け手にとっては「何らかに対しての理解不能」というトラブルを特定すればいい。そのため、トラブルにアクセスする労力もかなり小さくなる。

第五、例(12)で挙げた「理解候補+上昇イントネーション」という形式では、話し手が先行発話のある部分に対して理解上の問題が生じたことを明示しただけでなく、試解決案まで提供したという点から見れば、この形式を受けた側が自らトラブルを特定する義務さえなくなったと言えよう。したがって、トラブルを特定する労力も最も小さいと判断できる。

さらに、トラブルを特定してから修復実行に入る。しかし、修復実行の労力はトラブルの性質によってかなり異なる可能性がある。例えば、産出／聞き取りの問題ならトラブルになった部分を繰り返すだけで解決できるが、理解の問題に対してはトラブルになった部分を再解釈することが必要になる。一方、受容のトラブルとなると、先行発話の特定の部分ではなく、その発話の前提や推意などを受け入れがたいといった状況も生じうるため、いっそう労力がかかってしまうと言えよう。

従って、先述した受容段階に関わりそうなトラブルを特定する際によく使用される3種類の形式で開始される修復では、その修復を実行する労力も相応的に大きくなると言える。つまり、トラブルを解決する労力とは、トラブル特定の労力と正比例になっていると言えよう。「他者開始自己修復」という組織類型における他者開始表現の特徴について表8を示す。

つまり、他者開始自己修復という組織が発生した時、聞き手（即ち他者）が自分にとってのトラブルの性質によって異なる他者開始形式を使用する可能性を示唆している。一方、異なる開始形式が話し手（即ち自己）にかかる負担も異なっており、その大きさはトラブルが「物理的の失行（産出ミスや聞き取り失敗など）→理解レベル→受容レベル」といったような順に大きくなる。

表8. OISRにおける他者開始形式の分類基準

相手に課する特定の労力	他者開始形式の種類	相手に課する修復の労力
大 ↑ ↓ 小	非特定の開始標識（え？はい？など）	大 ↑ ↓ 小
	好ましくない返事（「かね/かな」のような文末形式がある）	
	先行発話の部分繰返し+文末イントネーション/って/だっけなど	
	疑問形式+上昇イントネーション	
	理解候補+上昇イントネーション	

6. まとめ

本稿では、英語及び日本語における他者開始表現について整理を行った先行研究をまとめた上で、その中には①他者開始の一部しかない②分類基準が不明瞭であるといった二つの問題点を指摘した。それらを解決するために、まず組織別に OISR/OIOR という2種類に分けて開始

形式を整理し、そして、「トラブル源を特定する程度の強弱」という従来の基準の代わりに、話し手の「修復要請の意図明示性」という視点から「相手に課する労力」及びそれと正比例になっている「相手に課する修復労力」という提案を出し、従来の分類基準での順序付けにおける不合理なところを解決した。

今回の他者開始表現に対しての順序付けは OISR に限っているところが先行研究と一致している。なぜなら、OISR における他者開始表現は「修復を要請する」という機能を持っているのに対して、OIOR における開始表現は性質上 SISR と似ており、「修復に入るのを標識する」機能しか持っていない。それに、修復の開始と実行が常に一体化しており、特に目立った開始形式を使用されていないものが数多くある。同じ手法では通用できないかもしれないが、自己開始の形式について整理する必要があるのであろう。

(ちょう れいれい・言語文学専攻)

トランスクリプトの表記方法

- [] 二人の発話が重なっている部分を示す。
- ,, 発話の途中で相手の発話が入った場合、発話がまだ終わっていないことを示す。
- …… 2秒以上の沈黙があることを示す。
- :
- 発話中のコロンは、直前の音が引き延ばされたのを示し、コロンの数は、引き延ばしの相対的長さを示す。
- ?
- 疑問符は、直前部分が上昇調で発話されるのを示す。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
- <#> 聞き取り不能の部分を示し、#の数で聞き取れなかった部分の長さを示す。
- 波線 発話者が笑いながら話していることを示す。
- 分析において注目する行は左端に矢印を付けて示す。
- 《文字》 転記者による様々な種類の注釈・説明を示す。
- 「文字」 直接話法で引用した部分を示す。

参考文献

- 串田秀也 (2005) 『「いや」のコミュニケーション学——会話分析の立場から——』『月刊言語』11月号, pp.44-51
- 串田秀也 (2009) 「理解の問題と発話産出の問題——理解チェック連鎖における「うん」と「そう」——」『日本語科学』25, pp.43-66
- 田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ」『月刊言語』11月号, pp.14-21
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究報 (国立国語研究所研究報告 103)』13, 秀英出版, pp.267-302

- 永山友子 (1996) 「展望：repair と呼ばれる言語方略について」『言語学論叢 14号』 pp.43-57
- 福原奈美 (2010) 「日本語会話における「くり返し」発話について」『言語文化学研究』第5号, pp.105-125
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 若松美記子・細田由利 (2003) 『相互行為・文法・予測可能性——「ていうか」の分析を例にして——』『語用論研究』第5号, pp.31-43
- H. サックス・E. A. シェグロフ・G. ジェファソン著 西阪仰訳 (2010) 『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社
- Kasper, G. (1985) Repair in foreign language teaching. *Studies in Second Language Acquisition* 7, pp. 200-215
- Schegloff, E. A. (2000a). When 'others' initiate repair. *Applied Linguistics*, 21(2), 205-243.
- Schegloff, E. A. (2001a). Lectures in the LSA Linguistic Institute at University of California, SantaBarbara, USA, in the summer of 2001.
- Shuya Kushida (2011). Confirming understanding and acknowledging assistance: Managing trouble responsibility in response to understanding check in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics* 43, 2716-2739
- Suzuki, Kana (2010). Other-initiated repair in Japanese: accomplishing mutual understanding in conversation. Unpublished doctoral dissertation, Kobe University.
- Svennevig, Jan (2008). Trying the easiest solution first in other-initiation of repair. *Journal of Pragmatics* 40, 333-348.
- Tomasello, M., G. Conti-Ramsden and B. Ewert (1990) Young children's conversations with their mothers and fathers: differences in breakdown and repair. *Journal of Child Language* 17 pp. 115-130